

増岡鼎陸将の思い出

平野 法治 陸自59

昨令和元年10月、陸上自衛隊に偉大なる功績を残された増岡鼎陸将（元東部方面総監）が逝去された。現役時代は全ての職務において顕著な実績を上げられ、ご退官後においては自衛官の楷行社入会を熱心に促進された。その間、ご発言は常に正義感に溢れるもので我々に勇気を与えて下さった。直接ご指導を受けた人間として感謝の念を込めて思い出の文を捧げたい。敬称は状況に応じて使わせていただきます。

我々防衛大3期生が増岡教官にお逢いしたのは、久留米の幹部候補生学校卒業時、富士学校普通科部から出張して来られた時であった。普通科幹部候補生に、今後の富士学校における教育訓練を説明し、当時針路に不安を持つ防衛大卒幹部候補生を確実に富士学校に異動させるための配慮があったと思われる。80名程であった普通科要員は、富士学校幹部初級課程（BOC）において2個区隊に編成されて、第1区隊は白井明雄1尉（後の第9師団長）、第2区隊は増岡鼎1尉が区隊指導官であった。このお二人の区隊指導官は、

当時の陸上自衛隊の最優秀教官であった。温情溢れる内務指導の面接、早速始まった小隊長のための教育・訓練は極めて的確であった。中でも、若年幹部必須の地点指示・敵状説明・命令下達等の模範展示は、思わず聞きほれる見事さで、メモ帳に一生懸命に書き取ったものである。火器班担当の小火器射撃の教育・訓練も極めて適切で、私は実弾射撃で全弾黒点命中の満点をとることができた。このBOCで受けた教育・訓練は、のちの中隊長・連隊長時代においても、習得技術を活用して射撃競技会等においては常に最優秀の成績を上げた。増岡教官は厳しい訓練においても、常に穏当、ユーモラスで、我々は楽しい雰囲気の中、統率上のヒントを多くいただいた。

増岡教官は、戦中は名古屋幼年学校の生徒として教育・訓練を受けられ、戦後は早稲田大学を卒業され陸上自衛隊に入隊された。強固な愛国心は戦中・戦後を通じて体得されたものであった。私は2年間の普通科連隊の小隊長勤務を終えると、防衛大学校訓練部勤務が発令されて小隊指導官となった。着任すると、何と直接上司の中隊指導官が増岡教官であった。防衛大においても、増岡教官の学生に対する指導は実に温かいものがあつた。あらゆる運動にも長じておられ、学生の課外活動と

一緒に運動に励んでおられた。学生に対する勤務評定も極めて的確であった。増岡教官は、この時期、幹部学校指揮幕僚課程（CGS）の受験年度であつたが、勤務時間中に教範等を開き試験準備をされるようなことは一度もなかった。それでも楽々合格、幹部学校に入校された。

それから数年間は、増岡教官との接点はなかったが、昭和47年、私が幹部学校CGSを卒業した時期、偶然お逢いする機会があつた。その時、「CGS卒業おめでとう。新任地は北海道にとばしてやったぞ。中隊長をしつかりやれ」と笑いながら話された。当時は陸幕の人事に勤務しておられた。

増岡教官は、昭和50年夏、外務省に出向し、在ソ連日本国大使館防衛駐在官として赴任された。多忙な職務に終始されロシア語研修の暇もなかった増岡教官ではあつたが、最適任者であると評価されていた。事実、モスクワにおいても極めて活発に勤務され、西側の武官団の厚い信頼を受け、西側武官団の中心的存在であつた。当時、ソ連当局は、西側諸国の武官団を反ソ連スパイ集団とみなし、危険な接触・工作を試みていた。そのような困難な環境においても増岡教官は堂々と外交官としての活動を行っておられた。その時機、英国の陸軍武官（准将）から西側

諸国陸軍武官団の連合組織(協会)を立ち上げる提案があり、増岡武官に中心となって取りまとめるよう要請があった。増岡武官は提案を快く受け入れて、組織の立ち上げを推進しておられた。西側武官団と言っても、当時の中国・インド等アジア諸国を含み、南米・アフリカ諸国にも参加を働きかけておられた。増岡武官の武官団における信頼性の高さが証明される活動であった。

3年後の昭和53年(1978)末、私に増岡武官の後任が発令された。陸幕人事にも勤務されていた増岡武官は、このような成り行きも十分認識しておられたのかもしれない。幼い3人の息子を含む家族5人の着任の面倒をやさしく見て下さった。

増岡武官は、前述のごとく、「陸軍武官モスクワ協会」の新編を推進され私の着任時、「平野は、協会の書記として、会則の編纂、定例会合の準備、離着任武官の紹介行事などをしっかり実行せよ」と協会書記の任務を申し送られた。

また、増岡武官は、「東南アジアの経済的弱体国家もソ連に武官を派遣している。彼らは、残念ながらソ連における活動に不可欠な外貨をほとんど持っていない。私用車も持っていない武官もいる。彼らを支援してやっ

しい。我々には余裕があるのだから」と経済的弱体国家の武官に対する支援を申し送られた。

私自身にとって、これらの任務遂行は武官団に浸透する絶好のチャンス、増岡武官の実績の継承に努力した。協会会長となった英国陸軍武官の適切な指導、モスクワにおいても大きな組織を持っていた米国大使館武官府の積極的な協力もあり、「陸軍武官モスクワ協会」は無事発足し、活動を開始した。協会に対するソ連当局の露骨な妨害もなかった。協会の定期会合などにおける相互友好・情報の共有など極めて効果的であった。この時期、中越紛争、アフガニスタン戦争、欧州戦域核問題、フォークランド紛争等相次いで緊急事態が発生し多忙を極めたが、増岡武官から申し送られた人脈に頼って任務を遂行することができた。

私が昭和57年6月、防衛駐在官任務終了によって帰国すると、増岡武官は市ヶ谷の東京地方連絡部長として勤務しておられた。帰国のご挨拶に参上すると、「グルジアでは大変だったな」と私のソ連南部地方旅行中のKGB工作を慰めて下さった。

増岡陸将は、その後も第9師団長、東部方面総監と要職を勤められ、陸上幕僚長への昇任を多くの部下に期待されていた。ご本人は、自らの出世のために信念を曲げられるようなことは

一切されなかった。特に、精強自衛隊はいかにあるべきか、そのために必要な自衛隊入隊者の精神的・肉体的資質の向上をいかに実現するか、という点については極めて熱心に現状の改善の必要性を主張しておられた。私自身の部隊体験の中でもそのことは最大の問題点であった。わが国の経済発展と共に若者の労働条件が改善され、心身共に緊張を求められる任期制隊員の募集が非常に困難になっていた。地方連絡部に臨時派遣された隊員の懸命の募集努力によって目標達成に努めたが、入

隊した隊員は、精神的・肉体的弱点を有する若者も多く、正統な教育訓練を實行して部隊編成を形成することには重大な障害があった。この状態の改善には、根本的な政治的・行政的改善策が必要であったが、現実の施策は極めて消極的で、部隊の苦痛は少しも改善されなかった。

自衛隊の健全性の向上に全力を尽くされた増岡総監は、昭和61年初頭、数社の月刊評論雑誌の対談において自衛隊の置かれている苦しい態勢の改善を訴えられた。この建設的な改善提案を、自らの行政施策に対する抵抗言質としてとらえた加藤紘一防衛庁長官が人事権を不当に行使した。自由民主党議員とも思えぬ「憲法9条堅持派」「日米安保消極派」を自認し、のちに「脱税事件によって失脚」した加藤防衛庁長

官は、中曽根首相の登用であった。この件に際して、中村守雄陸上幕僚長も深く退官されておられる。

増岡総監、中村陸幕長に最大限の敬意を抱いていた我々後輩自衛官は、このような不合理極まる懲罰人事に切歯扼腕、憤慨の極みであった。

1970年代後半、脅威国ソ連のモスクワにおいて、増岡総監が西側武官団の中心として活躍され、我が国の安全保障に顕著な貢献をなされた事実など、わが国の失脚政治家などは知る由もない。

潔く身を引かれた増岡総監は、旧陸軍将校の結社である偕行社の将来の充実のため、自衛官の入会促進に努力をされた。このため、遠く北海道・東北に足を延ばされたこともある。名古屋幼年学校から早稲田大学へ、そして陸上自衛隊へと一生を捧げられた自らの人生における最後のご努力であった。

偕行社の会合で同席した我々後輩に送っていただいた温かい笑顔が忘れられない。

自衛隊に対する国民の支持率は、今や、80〜90%となり、益々向上している。これは、増岡総監のごとき清廉潔白・積極果敢の人格者が、自衛隊を指導し牽引されたからに他ならない。

増岡総監には、天空から我々後輩、全自衛官に対して激励、いや叱声を送り続けていたきたいと強く念願する。